

この秋、さいたま市で開催される国際芸術祭
さいたまトリエンナーレ2016のアートプロジェクト「←」では、
まちなかに←をつくる参加者を募集しています。

みなさんのつくる←は、写真におさめ、大宮タカシマヤ内に展示。
←をたどる不思議な物語の一部になります。

このチラシをよく読んで、ぜひご参加ください!

つくってみる

思い思いの←をつかって、自宅または職場の外に飾ってください。
あなたの住む家や、働く場所から現れてくるのはどんな←?

←の向き

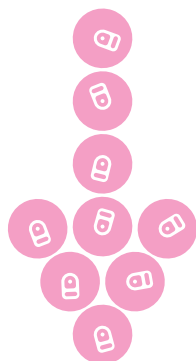
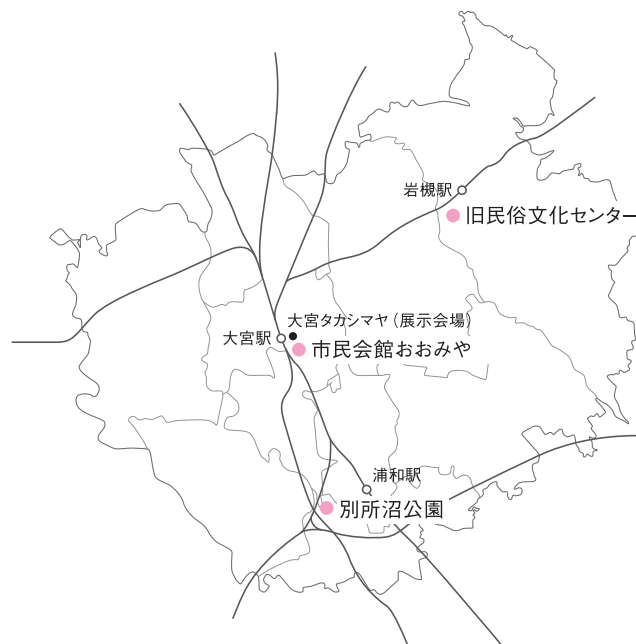
さいたまトリエンナーレ2016の主な開催エリアへの道しるべとなるように
地図の3つのスポットのどれかひとつを指す向きを
ご自宅(または職場)の所在地に合わせて決めてください。
*道をどちらに行けばよいかわかれればOK、厳密な方向を指す必要はありません。

←をつくる際のルール

- 私有地内におさめる
 - ・道路に面した塀などの壁面でも、道路に飛び出さなければOK
 - ・立体物でも、私有地におさまっていればOK
- 集合住宅の場合は管理組合のルールに従ってください
- 飾る期間はトリエンナーレ終了の12月11日まで(もっと短期間でもOK)
- 表示面積の合計は5平方m以下(それ以上の大きさはご相談ください)
- 交通ルールを感わさないように

ヒントがほしい!?

裏面にテスト版の写真があります。
また、←づくりのワークショップを随時開催します。
詳しくはさいたまトリエンナーレ2016公式ウェブサイト参照
または下記の登録・お問い合わせ先に気軽にご連絡ください!



登録

←をついたら登録してください。
かならず写真を撮りに行きます!

- 登録済の←には認定シールを発行します
 - 撮影した写真は、大宮タカシマヤに展示されます
 - 登録特典 写真家の撮影した写真を会期終了後にプレゼント!
- *登録・撮影はさいたま市内にかぎります(撮影には行けません、市外の←も歓迎します)。

下記のメール、WEB、またはFAXから、お名前・ご連絡先等をお知らせください。
メール、FAXの場合は「登録希望」とご一報いただければ、折り返し登録フォームをお送りします。

メール yajirushi@saitamatriennale.jp (やじるし担当) FAX 048-824-5361 (さいたまアートステーション)

WEB <https://saitamatriennale.jp/news/1327>

さいたまトリエンナーレ2016公式ウェブサイト > ニュース > 参加者募集中!

撮影のための登録日程

8/31(水) 9/20(火) 10/20(木) 11/20(日)

これらの日に合わせて作成・登録いただく、その後ほとんど撮影にかかっています。
*訪問して撮影するため、登録多数の場合、一定数で締め切らせていただくことがあります。
*撮影時に在宅の必要はありません。

*お知らせいただいた個人情報は、さいたまトリエンナーレプライバシーポリシーに基づいて管理いたします。
また、本事業の運営および必要なご連絡以外の目的で使用することはありません。

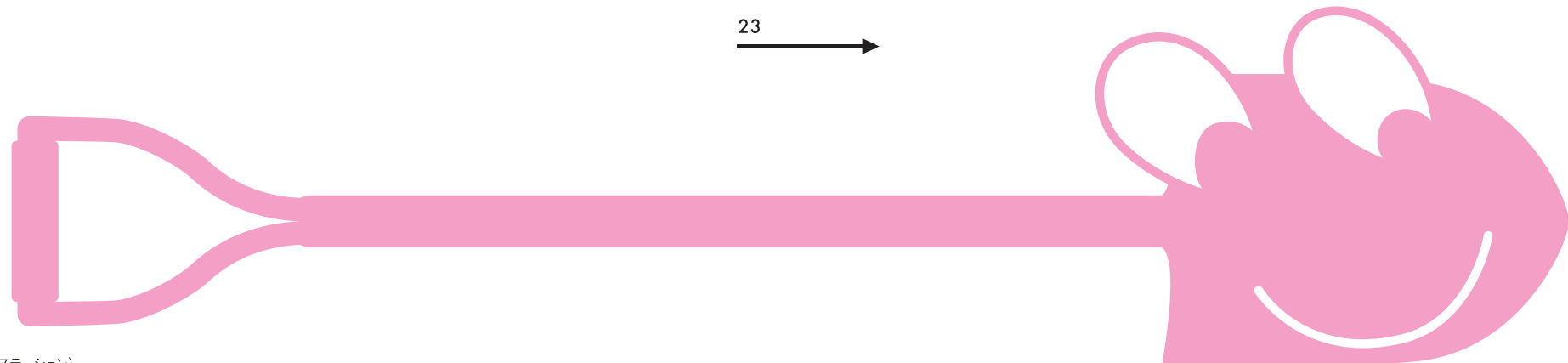
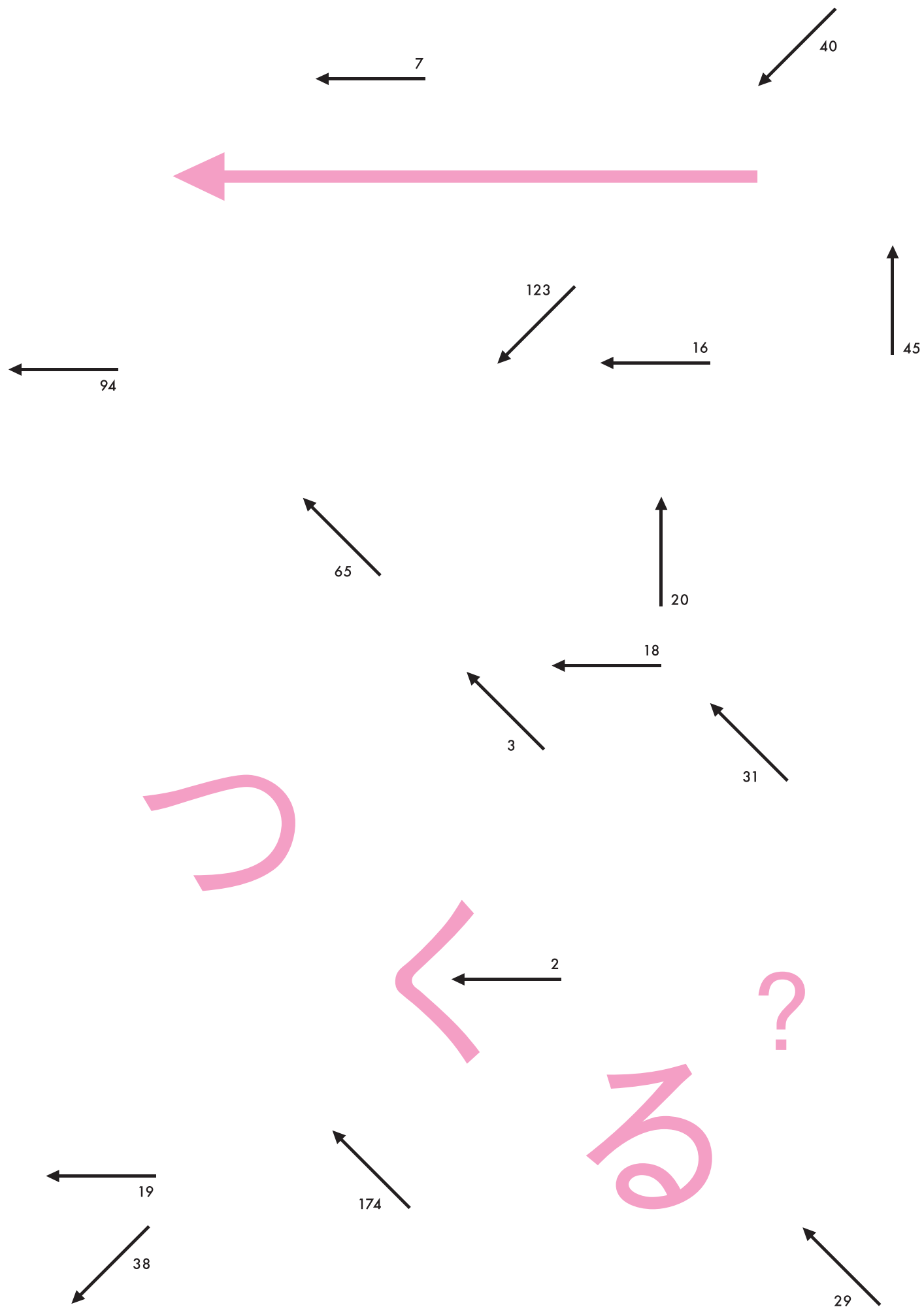
展示

写真はさいたまトリエンナーレ2016会期中
大宮タカシマヤに展示されます。
つくりなかつたも、つくったかたも、ぜひご覧ください!

登録された←の写真は全点展示します。
そのなかから選ばれた←の写真で、ポスターサイズの紙芝居を作成・展示します。

展示会場 大宮タカシマヤ ローズギャラリー(6-8階) さいたまトリエンナーレ2016会期中(9/24~12/11)
さいたま市大宮区大門町 1-32 *随時追加していきます。

会期中、まちなかの←を見て歩く「散歩ツアー」も計画中です。
詳細は大宮タカシマヤの展示会場またはさいたまトリエンナーレ2016公式ウェブサイトにて!



このプロジェクトについて 長島 確

今回、さいたまトリエンナーレ2016に参加するにあたり、2つの課題を考えました。

- 1) 留守のひとや、家から出られないひとも参加できるプロジェクトにしたい。
- 2) 特定の会場で見られない作品ではなく、あちこちに点在し、複数のエリアをつなぐ線や面のように広がるものになること。

私がふだん関わっている演劇というジャンルには、2つの特徴があります。

- 1) フィクションを扱うということ。架空の人物を演じたり、現実にはありえない物語を語る事ができます。
- 2) つくる側も、観る側も、同じ時間に同じ場所にはないと成り立たないこと。

これはつまり「ライブ」だということで、だからこそ面白さがあるのですが、反面、参加のハードルも高い。

観客も、その日その時間にその場所へ行かないと体験できないし、ましてやつくり手は、稽古から本番まで、連日、長時間の集団行動を強いられます。こうなると、プロでなければ、本当に時間の融通の利くひとしか関われなくなります。

今回、フィクションを使いながら、いろんなひとが自分の都合に合わせて参加できるようなプロジェクトとして、この「←」のアイデアにたどり着きました。太田省吾という劇作家の物語を出発点にしながら、実際につくる←は、進むべき方向さえ伝われば、形・大きさ・材料など、すべて参加者にお任せします。工夫して、自分の家または職場に合った←を、ぜひつくってみてください。あれこれ思案してモノをつくる楽しさを、アーティストだけに独占させておく手はありません。

家の外に花を飾ったり、表札やクリスマスの飾りに工夫を凝らしたりするように、今回、同じひとつのテーマで、いろいろなひとがまちなかで、それぞれほんのちよっとのアピールをして、通りがかるひととのコミュニケーションになれば、すてきだろうと思っています。

「←」
原作:太田省吾「エレメント」(1994)ほか「1(やじるし)」シリーズ
やじるしのチーム:長島 確(コンセプト・編集) 佐藤 慎也(プロジェクト構造設計) 藤谷 香子(衣裳)
場面美術(デザイン) 川島 一絵(写真) 岩川 清美(出演) 池上 綾乃(リサーチアシスタント) 宮武 聖堂(制作)
プロジェクト・ディレクター:森 真理子(さいたまトリエンナーレ2016) アシスタント・ディレクター:豊田 真理(さいたまトリエンナーレ2016)
協力:大宮タカシマヤ 埼玉大学教育学部石上誠行研究室 日本大学理工学部佐藤慎也研究室

さいたまトリエンナーレ2016とは
127万人のひとが生活するさいたま市に、世界に開かれた創造と交流の現場をつくりだすことを目指す国際芸術祭。
テーマは「未来の発見」。アートを鑑賞するだけでなく、共につくる、参加する芸術祭です。
まちの成り立ちや知られざる自然、土地の歴史など、生活都市ならではの魅力が見える。市内のさまざまな場所が会場となります。
国内外のアーティストたちが発見する、多様で多彩なさいたま。その魅力あふれるさいたまに触れ、私たちのこれからの未来を発見していきます。

会期 2016年9月24日(土)~12月11日(日)
主催 さいたまトリエンナーレ実行委員会
助成 文化庁(平成28年度文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業) 公益財団法人 野村財団
お問い合わせ さいたまトリエンナーレ実行委員会事務局(さいたま市スポーツ文化局 文化部 文化振興課 トリエンナーレ係)
Tel 048-829-1225 Fax 048-829-1996(受付時間 平日8:30~17:15)
E-mail bunka-shinko@city.saitama.lg.jp Web <http://saitamatriennale.jp> 文化庁

このチラシは5,000部作成し、1部あたり1枚の制作費用は55円です。(この印刷物の制作費用には、企画・デザイン料が含まれます。)





「見つかりそうで見つからないような→にしたかった」(プラ板、たこ糸)



「上の階にプラネタリウムがあるので、天の川をイメージして」(ひも、チェーン)

(ものがたり)

劇作家・太田省吾が書いた「↑(やじるし)」シリーズは、天井に現れた↑に導かれ、家を出ていく人たちの話です。まちへ出た彼らは、みなさんがつくる↑をたどっていくのかもしれない。

男1、天井を見ている。

男1 ……気づいたか。

女2 え……。

男1 いや……。春だ、うん、さすが春だ。

女2 なにが、父さん。

男1 いや、今、ふと気づいたんだ。

女2 なにが、さすがなの？

男1 春は、気持ち動く。春はね、そうなんだ。似たような温度でも、温度が似たようなもんで、秋とはそこがちがうんだ。どこかへね、行きたいような気持ちになる。

女2 ……。

男1 いや……うん、わかってるさ。ただの天井のシミなんだけども。

女2 矢印ね。

男1 そうだろう。

女2 あっちを向いてる。

男1 なんなんだ、いったい。

女2 うん……命令しているみたい。(あっちだぞ)。

男1 命令されたのかな。あいつ。

女2 天井見ていたわ、母さん。

男1 ……うん、そうだった。

女2 行ってみようか、父さん。

男1 え、……どこへ行くんだ。

女2 だから、あっちの方。

男1 あっちって、どこなんだい。

女2 どこって。

男1 目的地さ。

女2 ……でも、方向だけは、はっきりしているわ。あっちでなく、あっちでもなく、あっちでもない。

男1 うん……方向だけは、はっきりしているわけだ。

女2 ……夜の散歩おぼえてるわ。父さんと二人で遊園地まで歩いていった。いくつだったのかしら、父さんの歩幅が大きくてね、あたし走らなくちゃならなかったわ。

男1 ……きのう、電車の中でさ、気づいたんだ。あれだけ多勢つめこまれているのに、電車の中ってのは静かなもんだ。あれだけの人数の一人一人が、吊り革につかまって静かにしている。……黙って、なんかかんか考えてるんだ。……な、あそこのみんなが考えているってことは、電車の中だけじゃなくてさ、人間はどこどこにいるわけだから……何人いるんだったかな、地球に。

女2 六〇億よ。人口でしょ。

男1 うん……六〇億人か。

女2 ……遊園地の金網につかまって、中を見たわ。……大きな機械が見えた。

男1 な……すごいだろう……みんななんだぞ。みんなが考えている。……六〇億人が、いろいろ。

女2、天井を見る。

男1、天井を見る。

二人、矢印の方向へ。

太田省吾「↑(やじるし)」シリーズ「エレメント」(1994)より



「木で作られていて周りになじむ。上下から見ると一の形がはっきりする」(木、輪ゴム)



「さびが好き。中央の湾曲、タンクになじむさび加工を工夫」(粘土、塗料)



「石畳を照らす。舞台の照明もイメージ」(懐中電灯、テープ、セロハン)



「魚のような。うろこのような」(塩ビ板、ミラーフィルム)



「穴を掘ったら地面の中から出てきたみたいに。自然になじむ石っぽい素材」(岩場)



「フェイスブックのいいねに見せかけて、なるべく四角めに作りました」(紙粘土、塗料)



「ただの洗濯物のような、でも家族の雰囲気も見える」(白無地Tシャツ、布)



「竹林がすぐ近くにあるので竹で→を作りました」(竹)



「この壁を作ったときも、溝の部分に角材を当ててコンクリを流したはず」(角材、塗料)



「くりぬいて、後ろにある物が→に見えるように」(ステンレボード)